

## 研究ノート

## 世界価値観調査から見る日本人の宗教観について

小林 康 洋

## 一、はじめに

平成二七年の研究ノート「ソーシャルキャピタルと宗教」<sup>\*1</sup>のなかで、国際比較調査から見た日本の宗教団体の信頼度を示す指標として、世界価値観調査のデータ<sup>\*2</sup>（二〇一〇期）を引用したのだが、日本における宗教団体の信頼度は想像以上に低い数値であった。この調査については各国によるサンプルの抽出方法が同一でないことを指摘する意見もあるようだが、むしろ、何か日本人の特殊性の如きものが影響しているのではないかと推測したいところだ。国際比較の視座からの「調査報告書」といえるものが出版されている。「日本人の考え方 世界の人の考え方―世界価値観調査から見えるもの―」（池田謙一編著 勁草書房、二〇一六年）。そこで、この文献によりながら、時系列データ及び当該調査にあたり、宗教についてなされた設問について取り上げ、日本人の持つ宗教観について探っていききたい。さらに、日本世論調査会報「世界価値観調査」の方法論的な諸問題―実査の方法、質問と回答の形式・ワーディング、調査票の翻訳―（真鍋一史 二〇一七年）により、調査そのものの問題点も確認していきたいと考える。

## 二、世界価値観調査から見る宗教観

### 二―一 国際比較調査から見た日本における宗教団体の信頼度の推移

まず、二〇一〇期世界価値観調査及び欧州価値観調査におけるデータでは、宗教団体の信頼度においては、イタリア、ロシアで六〇％台、米国、スウェーデンで五〇％台、フランスが四〇％台、英国、ドイツで三〇％台、日本においては一〇％未満と、欧州のなかで比較的低い英国、ドイツの三〇％台を遙かに下回っている。またアジアとの比較においては、マレーシア、フィリピン、パキスタンが九〇％と突出しており、続いてシンガポール七〇％台、台湾六〇％台、韓国五〇％台、政治体制として特殊な事情を含むとされる中国の一〇％台よりも日本は低いということである。

日本における組織・制度における信頼度の推移、図一（クロス集計）に示されるように調査対象となる組織・制度のなかで「宗教団体」が最下位であることは一目瞭然である。また、時系列結果については、宗教団体の信頼度は一九九五年の一・二・五％から減少し、二〇〇〇年では一〇％を下回り、九・〇％、二〇〇五年には八・三％、二〇一〇年に至っては、七・九％と推移している。

### 二―二 国際比較から見る日本人の宗教生活の特徴

「日本人の考え方 世界の人の考え方」―世界価値観調査から見えるもの―より

一・三 「世界価値観調査から得られた知見・意義」で山崎聖子<sup>\*3</sup>は文化、価値観の多様性と宗教について次のように言及している。（二八―二九頁）

世界価値観調査では、さまざまな側面から人びとの宗教観について捉えようとしているが、それは大きく二つの次

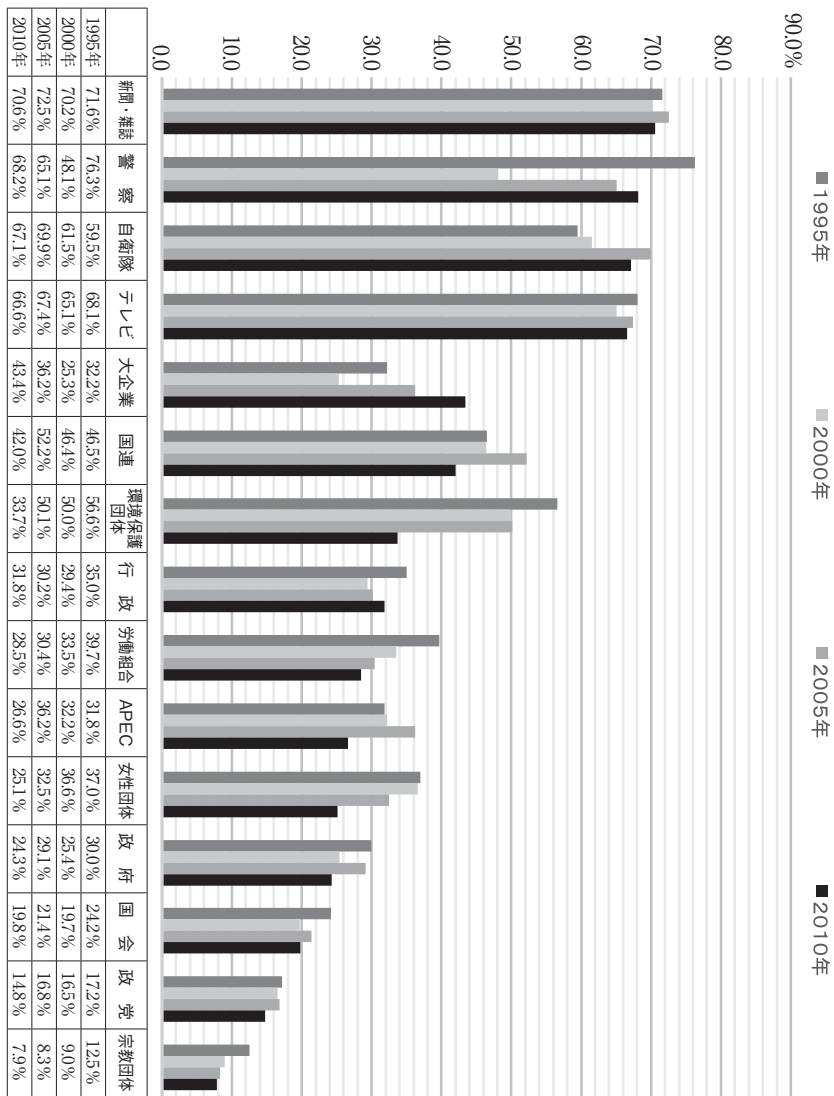


図1：組織・制度への信頼度の推移

(注) 18歳以上男女1,000サンプル程度の回収を基本とした意識調査の結果である。数字は各組織・制度に関し「非常に信頼する」と「やや信頼する」の回答率の計（分からない・無回答を含む合計に占める）。各組織・制度は2010年降順。

(資料) World Values Survey HP (2014.5.14) (2010年11月～12月調査の結果)  
 電通総研「世界価値観調査2005」国内結果レポート (2005年7月調査の結果)  
 電通総研・日本リサーチセンター編「世界60カ国価値観データブック」(200年7月調査の結果)  
 電通総研・余暇開発センター「世界23カ国価値観データブック」(1995年11月調査の結果)

元に大別される。第一は、宗教的な活動にどの程度参加しているか、宗教的信条をどの程度重視しているかといった日常生活の側面であり、第二は、政府の決定や人々の投票行動に影響を与えそうな宗教的スポークスマンを容認するか否かといった、政治・社会生活の側面である。一般的に脱宗教理論によれば、近代化し、生活のレベルが上昇すると、宗教への関与が低下し、半面、宗教的なファクターが政治に影響を及ぼすことに対して懐疑的になるといわれている。一方最近の研究では、逆に近代化は文化の多様性をもたらし、多様性が許容されることにより、宗教への関与も増大し、宗教的なファクターが政治に影響を及ぼすことについても、肯定的になるとの指摘もある。つまり、近代化は宗教に対して、一方では衰退をそして一方では成長をもたらすというまったく逆の作用を引き起こすというのだ。……

世界価値観調査では、この真逆の二つの仮説をともに支持する結果を示した。つまり近代化による一面——生活の安全レベルの上昇——は宗教の成長を促す一方で、近代化によるもう一つの側面——文化の多様性レベルの上昇——宗教の衰退を促すのである。したがって、宗教に関する将来変化を論じる場合、一方的モデルでのみ語ることは避けるべきであるといえる。「宗教の復帰」というシナリオを描くことは「宗教の消滅」という将来シナリオを描くことと同様に困難なのである。

さらに、二・三「宗教に関する意識」（八一―九二頁）で前田幸男は<sup>4</sup>（二）宗教と宗教観の国際比較、（三）日本人の生活と宗教と分けて分析している。

## （二）宗教と宗教観の国際比較

共産党が政権を維持している中国を除けば、無宗教の割合が多いのは、例えば、オランダ（六三・六％）、ドイツ（四五・九％）、韓国（四〇・八％）、アメリカ合衆国（三〇・四％）等のOECD諸国である。日本は宗教を持たな

い人の割合が五三・三%と多いものの、信仰する宗教としては仏教を上げる人の割合が三五・六%と、タイに次いで二番目に仏教徒が多い点が特徴的である。

宗教の有無だけではなく、さらに信心の度合いについて……世界価値観調査では、「宗教的な儀礼に出席しているかどうかは別として、あなたはご自分を信心深いと思いますか、それともそうは思いませんか」と尋ねている。……「信心深い」割合が低いのは中国だが、日本は二番目に低い。仏教徒の割合が九六%のタイでも「信心深い」人の割合は三二・一%にすぎない。その一方、中央アジアから中東そしてアフリカに至る地域では「信心深い」人の割合が多い。ただし、それらの地域でもアゼルバイジャンのように「信心深い」人の割合が三〇%を切る国がある一方で、東欧のポーランドや南米のコロンビアのようにカソリックが多い国では「信心深い」と答える人の割合が八〇%を超えている。その意味では、「信心深さ」の傾向を特定の宗教や文化と単純に関連づけて考えることは難しいようである。

世界価値観調査では宗教に関する二つの立場を対比した上で、そのどちらが回答者の考えに近いかを尋ねている。

具体的には、一つ目は、「宗教の基本的意義とは、宗教的戒律や儀式に従うことである」と「宗教の基本的意義とは、他人のために善行をあすることである」という対比である。……行為としての宗教（善行）と儀式としての宗教のどちらを重視するかについては国による違いが大きい。どちらかといえばイスラム教徒が多い国では儀式や戒律を中心に宗教を理解しているようだが、他人への善行を中心に理解する人が八割を超える国は、スウェーデン（八九・二%）、コロンビア（八六・五一%）、台湾（八四・一%）、カザフスタン（八三・〇%）等であり、何か共通する特徴があるようには思えない。……帰依している宗教と宗教観との関係はハッキリとしないようである。なお、日本の回答に特徴的なのは、やはり、「分らない」と答えた人がもつとも多いことである。（四八・六%）したがって、宗教とは、「戒律や儀式に従うこと」（一五・六%）と考える人の割合も「他人のために善行をすること」（三五・八%）と

考える人の割合も、他国と比べて非常に少ない。

実は、同様の指摘はもう一つの対比についても成り立つ。……宗教の基本的意義は、「死後を意味のあるものにする」と「現世を意味のあるものにする」となにかを二者択一で尋ねている。宗教を死後の問題としてとらえる国を見ると、パキスタン、トルコ、モロッコのようにイスラム教徒が九九%をしめる国……ナイジェリア（キリスト教五〇%、イスラム教三八%）やガーナ（キリスト教七九・三%）でも宗教を現世よりも死後の問題と考える人は多い。宗教を死後の世界の問題と考えるのは、宗教というよりは地域の違いのようで、基本的に中央アジアから中東、そしてアフリカに至る国々が宗教を死後の問題としてとらえる傾向が強い。宗教を現世の問題と考える国が多い国には、メキシコのようにキリスト教徒が八割を超える国から、カザフスタンのようにキリスト教二八・三%、イスラム教五一・一%の国もあると同時に、東南アジアのフィリピンや北欧のスウェーデンもあり、共通の特徴があるように思えない。日本の特徴はこの対比でも、「わからない」の割合が四二・六%と多いことである。宗教の基本的意義を「死後を意味あるものにする」と答える人は九・七%で二番目に少ない。宗教の意味を現世に見いだす人の割合は四七・七%（五七か国中で多い方から四三番目）である。ここでも、日本人は宗教について一定の考えを持つよりは、曖昧な立場に始終しているように見える。

## （二）日本人の生活と宗教

日本人で宗教を持っていないと答えた人は五三・三%になるが、では、日本人の中で宗教をもっていないのは誰なのだろうか。結論からいえば、日本で宗教の有無を考える上で重要なのは、年齢と婚姻である。宗教を持っていない人の割合は、一番若い一八〜三九歳のグループでは六八・六%であるが、四〇から五九歳では五三・五%、そして、六〇歳以上では四〇・五%と減少していく。その一方、宗教は仏教であると答える人の割合は、二〇・八%〜三五・

〇%、そして五〇・九%と増加する。……もし、時代状況にかかわらず人が歳を重ねると共に宗教的になっていくと考えるならば、それは加齢の影響だということになる。

次に婚姻状態によって、宗教の有無がどう変わるのか。……独身で宗教を持たない割合は六六・八%で、一度結婚を経て離婚・別居した人の割合は、六四・八%になる。それが、既婚者では四九・八%に減少し、さらに死別をする<sup>1)</sup>と三六・八%にまで落ち込む。一方、宗教は仏教であると答える人の割合は、独身と離婚・別居がそれぞれ二一・五%、二六・一%なのに対して、既婚者で四〇・八%、死別で五〇・四%と増加する。年齢による宗教の違いの背景には、婚姻を通じた家族形成のライフスタイルがあるように思われる。日本ではキリスト教を信じる人の割合は少ないので、無宗教から転じる場合を選択されるのは圧倒的に仏教である。若い頃は宗教を「持っていない」と答える人も生まれ育った家庭あるいは親族の間では、葬儀や先祖の供養は仏式で行われていただろう。子どもの頃や独身時代は、家庭の冠婚葬祭にも周道的にかかわるだけであろうが、結婚して家庭を持ち、子どもを授かったり親を失ったりすることで、信心を大事にするようになるのかもしれない。ただ、婚姻と宗教の結びつきは、より直接的には、仏事、具体的には親あるいは配偶者の死を通じて、葬儀や法要など、宗教的な儀式を経験することによるものだと思われる。既婚者と、既に配偶者を失った者の間には、当然年齢差があるが、配偶者を失うことで、さらに仏教を選択する人が増えることが、家族形成のサイクルと宗教との関係を裏書きしている。

世界価値観調査で宗教をたずねる場合は、「あなたは、現在、何か宗教をお持ちですか。次の中から一つだけあげて下さい。」となっているが、質問の対象としては、「あなた」すなわち回答者個人である。もし、これが個人の宗教ではなく、「家」あるいは「家族」の宗教をたずねていたら、回答の分布は大きく違っていたかもしれない。宗教を持っていないと調査に答える人も潜在的には、家族の関係を通じて、特定の仏教宗派との潜在的なつながりを持っていることが多いと思われる。その意味で、日本人の無宗教は、確信を持った無神論というよりは、表層的なもので、

多くの人は潜在的には特定の宗派への親近感があると思われる。……選挙にたとえると、確信をもった無神論者は決して投票に行くことがなく政治に背を向けた人である。それに対して、自分は無宗教だと考えている日本人の多くは、潜在的には特定の党派へ親近感を抱きながらも、世論調査の質問に対しては「政党支持なし」を選ぶ人に似ている。

宗教はないと答える日本人が、実は宗教を拒絶しているわけではなく、場合によっては、宗教的な営みに参加していることを確認しておこう。「冠婚葬祭は別として、あなたは最近どの程度教会に行ったり、お寺や神社にお参りに行ったりしていますか」と「冠婚葬祭は別として、あなたはどの程度お祈りをしますか」という設問に対する回答……宗教を「持っていない」と答える人も、その六%が月一回以上お寺や神社にお参りにいっており、また一三%は週に数回以上お祈りをしている。……宗教を信じていないと言葉で言うことと、実際の行動とは、別のようである。また、無宗教の人の六三%は特別の日にはお参りに行くし、また、行事があればお祈りをしている。やはり宗教も「持っていない」と答えても、潜在的には宗教を持っていると理解しても良いのではないだろうか。

最後に「宗教的な儀礼に出席しているかどうかは別として、あなたはご自分を信心深いと思いますか、それともそうは思いませんか。」について、宗教の有無毎の分布を見てみよう。面白いことに、宗教を持つていない人の一三%は自分自身を信心深いと考えている。宗教はないと言い放つ人でも、「無神論者である」と断言するのは、その中の一七%にすぎない。半数以上の五三%は、「信心深くはない」と答えているので、正面から宗教を否定する考えはないのだろう。……日本人が社会調査で無宗教であると答えるとしても、潜在的には家族の絆や先祖の供養を通じた宗教的な感性を持っているのではないかと思われる。

### 三、「世界価値観調査」の方法論的な諸問題より

真鍋一史<sup>\*5</sup>は、「世界価値観調査」の方法論的な諸問題<sup>\*6</sup>のなかで、前述の「日本の回答に特徴的なのは、やはり、『わ

からない」と答えた人が最も多いことである。」という記述について疑問を呈し、方法論を検証するなかで日本における「宗教意識」の諸相を考察している。

「わからない」という回答は、日本人の宗教に対する「曖昧な立場」を表すものとし「解釈」されている。しかし、報告者の観点からするならば、「わからない」という回答は常に単一の意味内容を持つわけではなく、そこには複数の意味内容が含まれる可能性がある。

として、次の①～③点をあげている。

① 「宗教」についての質問項目に関しては「わからない」という回答は、「知識・情報・理解力の不足」とは全く逆の、いわば、「深い思索」の結果という場合もありうるのではないであろうか。

② 「宗教」いうテーマに限らず、より一般的に、人びとの日常生活においても、「人はある事項について知れば知るほど、その事項について単純に判断することができなくなる」ということがある。……質問の事項そのものが知識・情報・理解力の不足のために「わからない」という次元と、知識・情報・理解力があるために、かえってその事項が「わからない」という次元の少なくとも二つの次元があることが示唆されるものである。

③ “Don’t Know” も “Can’t Choose” もいずれも日本語の調査票では「わからない」と訳出されている。……この事実は、「わからない」という選択肢のカテゴリイが、「そのような事項には全く考えもおよばない」という次元と、「そのような事項の二分法的な判断については、どちらともいえない」という意味の次元の、二つの次元を含んでいることを示唆している。「わからない」という回答が、後者の次元である場合は、それは、「社会測定論」の立場からするならば、“off scale” としてではなく、むしろその scale の “middle point” として扱われるべきものということになる。

「わからない」という回答の%の国際比較においては、そのような調査における各国ごとの「実査の方法」や「質

問への回答の形式」の違いといった方法的な諸問題を考慮に入れなければならない。

とし、さらに方法的な問題として①「実査の方法」の影響、②「質問への回答の形式」の影響、③「質問項目欄の表現の非一貫性」を取り上げている。

①「実査の方法」の影響……宗教意識」に関する質問諸項目も「留置」の形で、したがって、「自記式」で、その回答がなされた可能性が高い。そして、そうであるならば、これまでの「社会調査の経験則」から、そのような「自記式」の場合は、「面接法」にくらべて、「わからない」という回答の%が高くなると考えておかねばならない。

②「質問への回答の形式」の影響……日本の調査票では、「わからない」という回答が該当しない場合を除く、すべての質問事項において、「わからない」の欄が設けられている。こうして、「わからない」というカテゴリーが選択肢にある場合は……それが選択肢に「ない」場合とくらべて、「わからない」という回答の%は高くなるものと考えられるのである。

③「質問項目欄の表現の非一貫性」の影響……「問四三あなたは、現在、何か宗教をお持ちですか」という質問がなされ、その選択肢として、「○ 持っていない」「一 キリスト教（ローマ・カソリック）」「二 キリスト教（プロテスタント）」「三 キリスト教（その他）」「四 ユダヤ教」「五 イスラム教」「六 ヒンズー教」「七 仏教」「八 その他の宗教（具体的に                      ）」「九 わからない」、があげられている。ここで問題は、「神道」が独立した選択肢としてあげられていないという点である。では、なぜ、この点が「問題」となるかというところでは、この質問につづく、次の質問で、「問四四あなたは最近どの程度教会に行ったり、お寺や神社にお参りに行ったりしていますか」と尋ねられているからである。つまり問四四では、明らかに「神社」が「指示対象」となっている。……問四三と問四四とはその質問の表現が明示的には一貫していないといわざるをえないのであ

る。そして、このような問四三の回答形式からするならば、「自分の宗教は神道だと思っている」回答者は、選択肢の「八 その他の宗教」を選び、「具体的に」に続く（ ）内に「神道」と記入することになる。しかし、このような一手間かかる回答形式の場合には、独立した選択肢として「神道」が設けられている場合にくらべて、どうしてもその回答の%は低くなると考えられるのである。

以上、世界価値観調査の方法論的な問題の所在を具体的に明らかにしている。（真鍋、二〇一七）

## 四、おわりに

世界価値観調査（二〇一〇期）データにおいて、日本の宗教団体の信頼度の低さに驚いたことが本稿へのきっかけとなった。私自身、当初は「宗教団体」という括りのなかには「お寺」は含まれていないのではないかとという偏見をもっていたように思われる。それは、オウム真理教事件等で作り出された悪いイメージとは、かけ離れたところに我々寺院・僧侶が存在している筈だという思い込みからである。しかし、調査の設問を知るにいたっては、宗教界全体としての評価として受け止めざるをえない。

宗教の基本的意義について、行為としての宗教（善行）と儀式としての宗教のどちらを重視しているかの設問も、僧侶である自身も「どちらも大事」であると言うだろう。まして、回答する人間にとっては、果たして自分の属する宗派はどちらに重きを置いているのか、答えを出すのに苦慮するだろう。我々、日蓮宗教師は「生死即涅槃」、「娑婆即寂光」という言葉をよく使うが、「現世」と「死後」を完全に分離したものとして捉えていないことから、「死後を意味あるものにするのか」、「現世を意味のあることにするのか」といった二者択一も同様で、「どちらでもない」という意味での「わからない」と回答がなされ、これもまた曖昧な立場と解釈されても致し方ない。

社会現象として、人口減少、生涯未婚率の増加や、火葬のみで葬儀をしないという選択をする人が増加している現

状では、とても楽観視はできないが、個人の宗教ではなく、「家」「家族」の宗教として日本人のライフスタイルのなかで、葬儀、法要を通じた潜在的な宗派とのつながりということは重要な指摘だと捉える。菩提寺を持たない家で葬儀が出た場合、誰に頼むのか、後に墓所を決める際に、実家の宗派が少なからず影響を与えているようである。今後の課題として、日本国内における意識調査や宗教行動について調査し、潜在的なつながりを存続するための指標を探っていきたいと考える。

### 《参考文献》

- ・世界各国における組織・制度への信頼度（世界価値観調査二〇一〇期）
- ・電通総研「世界価値観調査二〇〇五」国内結果レポート（二〇〇五年七月調査の結果）
- ・電通総研・日本リサーチセンター編「世界六〇カ国価値観データブック」（二〇〇年七月調査の結果）
- ・電通総研・余暇開発センター「世界二三カ国価値観データブック」（一九九五年一月調査の結果）
- ・日本人の考え方 世界の人の考え方―世界価値観調査から見えるもの― 池田謙一 編著 勁草書房、二〇一六年
- ・「世界価値観調査」の方法論的な諸問題  
―実査の方法、質問と回答の形式・ワーディング、調査票の翻訳― 真鍋一史  
日本世論調査会報（二一九）二八―三六、二〇一七―〇三、日本世論調査会
- \*1 「ソーシャルキャピタルと宗教」現代宗教研究（49）、383-396、2015-03、小林
- \*2 世界数十か国の大学・研究機関の研究グループが参加し、共通の調査票で各国国民の意識を調べ相互に比較する「世界価値観調査」が一九八一年から、又一九九〇年から五年毎の周回で行われている。各国毎に全国の十八歳以上の男女一、〇〇〇サンプル程度の回収を基本とした個人単位の調査である。

- \*3 「世界価値観調査」 日本代表及び科学諮問委員会委員、帝京平成大学講師、東京大学客員准教授を歴任
- \*4 東京大学大学院情報学環教授
- \*5 日本の社会学者、青山学院大学教授、関西学院大学名誉教授
- \*6 「世界価値観調査」の方法論的な諸問題―実査の方法、質問と回答の形式・ワーディング、調査票の翻訳―真鍋一史、  
日本世論調査会報 (119) 28-36, 2017-03